

太田東西かわら版

2020.1

「老病死」の意味



2020年を迎えた我が家の正月の様です。
息子2人も帰省して来て、介護状態の父親もなんとか年を越すことができて
家族で集えた喜びもひとしおでした。

ふつう正月の宴は「明けましておめでとうございます」「今年もどうぞよろしく
お願いします」「おせち料理、美味しいね～」が主流。
新年を迎えた祝いの場で、まさか「老病死」の話などしないでしょう。

息子らが自立した今、3世代6人全員、滅多に揃う機会はありません。
チャンスは逃さないのが太田東西です。
楽しむことは大切。でも、スッキリして楽しめたらもっといいはず。

父は81歳。余命半年の宣告されましたが、かかりつけの在宅医を不思議がらせるほど、医学の常識を覆し3年が経過しました。

しかし、それが喜ばしいことばかりではありません。
この3年の父親の姿を見て来て思うことは、確実に弱り、自分で自分の事ができなくなってしまったという現実。

去年は10回目の入院も経験しました。救急車も初体験！
そうした繰り返しに寄り添って来て、正直思うのです。

「父親は何のために生きているのだろう？」と。

毎日起きて、食べて、テレビと向き合って、訪問看護を受けての繰り返し。
デイサービスやショートステイに出かけることなく、ずっと家に居る。

「父親の生きている意味は、喜びは何なんだろう？」と。

それはあれこれ思惑しても答えは出ません。
本人に直接尋ねてみるのが一番です。そこで尋ねてみました。

「お父さん、よく聞いてください。今から尋ねることは、家族全員に聞かせたい、家族が知りたいことなのです。だから胸の内を正直に教えて。今月号の太田東西かわら版ネタにもする予定だから（笑）」



お父さんの心には相反する気持ちがあると思う。これまで奇跡的に何度もV字復活したことは嬉しいだろうけど、代わりに自分一人でできていたことがどんどんできなくなっている。今では呼吸も歩行もままならない。嫌と言うほど“老いと病の辛さ”を経験しているでしょう。

生きる、生き切るということは、かくも大変で辛いのか・・・できていたことができなくなった自分自身を“情けない”と感ずることもあるでしょう。

“抗えない老い”と“治る見込みのない病気”の悩みから解放される時はいつか・・・？と冷静に考えれば、それは人生のゴールを迎えた時。

でも、かと言って死にたくはないと思う。死は家族とのお別れの時だから。その家族の中で自分が最年長であり、最年長者から旅立つのは自然の理だと頭では理解しているだろう。だけど、死にたくない。

お父さんの中にはそうした葛藤があると思うし、介護に携わる我々家族もそうした葛藤を抱えているのです。

「どう思っているんだろう？」「どうしてあげることが一番なんだろう？」それが私たち家族が知りたいことです。そこでズバリお尋ねします！

「もう十分生きた。そろそろ楽になりたい。妻をはじめ家族に、もうこれ以上心配や迷惑を掛けたくない」

そう思っているのか？ それとも

「老いと病は辛く苦しいけど、妻に迷惑かけて悪いけど、まだ死にたくない。妻といるだけで自分は幸せ」そう思っているのか？ どっちかな？

すると・・・・・・・・・・

「まだ死にたくない、今幸せ」 ですって！！!(´ `)

思わず、父親に

手を合わせました～～！！(笑)



父のその回答を受けて、今度は母親（77）へ尋ねてみました。

「最期看取るまではいっしょに居るけど、その後は“おひとりさま”の生活を存分に楽しむつもり。東京の知人にも会いに行くわよ！もし私が介護疲れで先に逝ったら、その時は観念して施設に入るように言ってるから大丈夫よ～」なんとハキハキした気丈な母親でしょう！（笑）

太田家のようにと申しますか、私のように子どもが親に対して自分の考えを言える関係なら、介護のストレスや家族間の緊張も軽減するはず。しかし多くは、老病死の現実を他人（医療介護関係者）に全面的に任せたりあるいは親孝行の観念に呪縛され、自分を犠牲にして親の介護に没頭しているご家族が目立ちます。

ともに共通していることは、「死・死別＝不幸」と決めつけて、その時（死別）と向き合いたくないから死に対して深く考えないという“逃げの姿勢”。そこには「老病死なんかに意味はない、人間死んだらおしまい」といった残念無念・敗北の死生観があるからでしょう。

人生のゴールである「死」。その過程の「老いと病」。それは悲しみや寂しさだけではなく、家族にとって他では体験できない学びと感動があるのです。

では、私の父親の「生きている意味」は何か？
それは、本人自らの「死の受容」だけではなく、私たち子や孫に**「生き切る姿」「老いて病んで死んでいく姿」**。それをまざまざと見せてくれているのです。

そして私の母親に対しては、最大限に寄り添ったという達成感で、夫との**死別の悲しみを乗り越えさせる意味がある**と感じます。

家族の誰かが現状を冷静に俯瞰して、「老々介護」「老病死」を悲観せずにそこに意味を見い出す。**どんな時も家族にはそれぞれ「役割（お役目）」がある**という肯定的な目を持って共有していく。

超高齢化社会から多死社会を迎える日本。
だからこそ、老病死をタブー視せずに
<本音で話し合える家族>
<老病死を恐れない家族>目指して
家族が進化していく必要があります。

